召喚師の転生物語

如月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
召喚師の転生物語

【Ｎコード】
Ｎ６５８４Ｙ

【作者名】
如月

【あらすじ】
死んで宇宙人に会ってハイ転生……というありきたり？　なフェアリーテイルの二次創作物語です。オリ主最強が嫌いな方は見ない方がお勧めです。

プロローグ

「かくかくしかじか。というわけで、転生ね」
「……は？」

思わずアホ面してしまった俺は悪くないと思う。
自分の部屋で漫画読んでふと周りをみたら真っ白だったんだぞ？
そんで目の前には男か女か分からない中性的な人がいたわけだ。
なんだこの状況。

「いや、は？　じゃなくてさ。転生だよ転生。やったね」
「ちょ、ちょっとまってくれ。あんたは誰だ？　そしてここはどこ？　転生ってなんで？」
「……あれ？　地球人ならかくかくしかじかで通じると聞いたんだけど？」
「誰から聞いたんだそれは。伝わるわけないだろ」
「ふぅん、そう？　まあいいや、質問に答えると自分は宇宙人で、ここは次元の狭間で、転生の理由はＳでＮなｈｙうお」
「……」

なに言ってんだこいつ。
返ってきた返答を聞いた途端、頭がスーッと冷えていくのが分かった。
今なら何を言われてもへーって言える。
自分は宇宙人？　……あぁ、薬に手を出しちゃったのか？
それか変な宗教に入ってるのかな。
ここは次元の狭間？　俺は今まで生きてきた中で一度も聞いたことがない。

転生の理由――――地球語でしゃべってくれ。

　夢から覚めたら脳の検査でもしてもらおうか。
　しかし夢でこんなイタい人が出てくるとは。
結論――――これは夢なんじゃないか？　うん、そうに違いない。

「ちょ……まって！？　なんでそこで夢にたどり着くの！？」
「いや、そう考えるしかないじゃん？　どうせ漫画読んでるうちに
いつの間にか
眠っちゃったんだろ？　あとさも当たり前のように俺の心の中読むなよ」
「心を読んだのはあやまるよ。けどね、夢じゃなくて君は死んだんだよ」
「死んだ？　しん……しん……死んだ？　はは、うっそだぁ。俺ここにいんじゃん」
「ここにいるって言っても精神だけ。肉体は君のいた世界でとっくに火葬されてるよ。証拠に……はいこれ。君のいた所の新聞。君の死因について載ってるから」

いつのまにか宇宙人の手に握られていた新聞紙。
手にとって見てみる。

――――あった。

○○県△△市に住んでいた？？？？さんが
頭から血を流して倒れているのが発見された。
　足元にはバナナの皮が落ちており、
頭の横に血のついた石が転がっているのをみるところ、
バナナに足を滑らせて転び、床にあった石に頭を打ったと思われ

る。
病院に運ばれたがしばらくして死亡。
死因は脳出血。ご愁傷様です。

「……」
「……」
「……」
「……ん？　どうしたの？」
「……これは、……本当に俺か？」
「そうだね。納得できなかったら別の証拠みせるけど？」
「……。いや、いい。もう知ったから」

知った事を言うと、宇宙人の目が見開いた。

「……これは驚いたね。世界が君に情報を渡したんだ？」
「さあ？」

この記事に書いてある男は俺だ。
なんで、とかどうして分かる、とかそうゆうのじゃなくて、ただ分かる。間違いなく俺だ。
このアホ丸出しで死んだのは。
しかしそれを知っても悲しいとは思わない。むしろ羞恥心の方がでかい。
まあ、終わったことだからしょがないし。
死んじゃったものはどうしようもないんだからな。
前向きに考えよう、前向きに。転生できるんだぜ？　やったじゃん。

「――――と、いうわけで。落ちつきました」
「……ずいぶんと切り替えがはやいね。もっと取り乱すと思ってた

んだけど？」
「んー。まあな。とくに大切な人とかいなかったし」
「なるほど。切り替えが早いのはすきだよ」
「どーも」

「じゃあ次はこれやって」

宇宙人がパチンと指を鳴らす。
すると目の前にガラガラが現れた。回すと玉が出てくるアレだ。

「なんだこれ？」
「ガラガラ。出てきた玉の色で君にあげる能力が決まるから」
「え、能力？」
「うん。そうだよ」

……え、あれ？
こんなので決めるものだっけか、能力。

「ああ、神様だったら望みどおりの能力くれるんだろうけど、わたしは宇宙人だからね。わたしらのせいで死んだんでもないし。それは無理なんだ」
「そ、そうか。ところであんたの言う宇宙人ってのがなんなのか聞きたいんだけど」
「ｆｈぺｓｈｆｂんｆ」
「……え、なんて？」
「だから、ｆｈぺｓｈｆｂんｆだって」
「……」

誰か、ほんやくコンニャク持ってきてーーー！
それかドラエもん呼んできて！

「……あぁ、ごめん。地球の言葉にできないみたい。
わたしが宇宙人のことについてはあきらめてほしい」
「そ、そうか。なら仕方ないな」

くれるだけありがたいと思おう。

ガラガラの取っ手を持ってガラガラと回す。……だじゃれじゃないよ。
しばらく回していると、中から透明の玉が出てきた。
透明……？　めずらしいな。

「透明……？　初めてみるなぁ。ちょっと待ってて」

宇宙人も分からないのか、ポケットから手帳をだしてページをパラパラとめくる。

「あ、あったあった。……おお、割といいのが出たじゃん」

楽しそうに言う宇宙人。一体どんな能力が出たんだ？

「なんだった？」
「えっと、能力名『万物召喚・操り師』　宇宙に存在するあらゆるものを召喚、操る事ができる。
想像上のものでも生き物でも召喚可能」
「すげえチート！？」

マジか！
それだったらモンハンのモンスターとか、伝説上の武器とか使えるんじゃないか？

「ただし」
「え？」
「同時にいくつも召喚できるけど、召喚してる間、一度でも術者が相手の攻撃を受けたら
即終了。要は防御が紙だってこと」
「なぬ！？」

オット！？　ダメじゃん！　召喚したものが出てる時は攻撃受けちゃだめって事だろ？

「……いや待てよ。使いようによってはなんとかなるか……？」
「まあそうだね。どっかに隠れたり、召喚したものに守ってもらえばいいし」
「おお！　そう考えれば結構いい能力……？」
「結構、じゃなくてかなり良い能力だよ。他の能力に比べれば、だけど」
「他の？　そういや別の色の能力ってなんだ？」

青とか緑とか白とか。金も聞いてみたいな。
金だったらよかったのに。

「そうだね……。白だったら、『魔力無限』。文字通り魔力が無限ってことだよ。
ただし、魔法は一日一回だけしか使えない」
「うわ……」
「緑は『未来直視』　数秒先の未来をみる事ができる。
けど見える未来は完全にランダム」
「……」
「赤は『瞬間記憶』　見たものを瞬間的に記憶できる。

でも記憶できるだけ」
「……」
「青は『絶対防御』　ありとあらゆる攻撃が効かない。
けれど発動させてる間は動けないし、発動継続時間も一分だけ。
しかも一度使ったら気を失う」
「ひでぇ……」
「紫色は『不老不死』　これは言葉の通りだよ。
けれど赤ちゃんに転生しちゃったら不老だから成長しない。ずっと赤ちゃんのまま」
「生き地獄！？」
「うん。赤ちゃんに転生しなかったらいいだけだけどね。
ちなみに赤ちゃんに転生する確率は９１パーセント」
「……」
「ハズレのう〇こ色は「おい、茶色って言え」……茶色は何もなし。
前世の記憶を持って転生できる事が特典」
「をい」
「で、金だけど、能力名『絶対最強』　能力を使ってやめるまで最強になれる」

つよっ！？

「使うたびに幸運、人望、恋愛運、金運などが一気に下がるけどね」
「……」

明らかにメリットよりもデメリットの方が大きいよな。
もらっても嬉しくないとはこのことだ。

「黒もあるけど。これも結構ひどいなぁ」
「ど、どんな？」
「能力名『完全平等』　相手の防御力を零できる。使えば相手に攻

撃を当てれば
絶対に勝てるんだけど……そのかわり自分の攻撃力も零になる」
「……意味なくねえか？」
「ないね。でも能力使って周りの仲間に攻撃させればいいでしょ？」
「確かに」

「ようはどんな能力も使い方ってことなのさ」
「そうだけど……俺のもらった能力がかなり良い方だってのはわかったよ」
「うんうん。君は運がいいほうだね」

腕をくんでうんうんとうなずく宇宙人。

「で、次は何すんだ？　異世界に送ってくれるのか？」
「いや、今から君は修業してもらうよ。異世界に行ってもすぐ死んじゃったら意味ないから。
修業先は……そうだね、トリコのグルメ界でいいよね」
「……え？」

今なんつった？　グルメ界って聞こえたような。
はは、まさかね。空耳空耳。
いくらなんでもついさっきまでひ弱な一般人だった俺をあんな危険極まりない所に
放り出すわけないよな？

「グルメ界にいる間は不老になるからね「まてまて」……？　なに？」
「いや、なに？　じゃねーよ。グルメ界？　あの捕獲レベル測定不能の猛獣が
うじゃうじゃいる所に俺を入れると？」

「うん」
「うん！？　うんだと！？　そこは否定してほしかったよ！
俺あそこに入った瞬間に死ぬ自信あるぞ！　別の場所にしてくれ！　一生のお願いだから！」
「それはダメ。もう決めちゃったもん。それに君の一生はもう終わってるよ」
「おいぃ！」
「修業期間は二百年ね」
「にひゃっ！？」

やばい！　この宇宙人を今すぐ止めろ俺！

「よしっ！　転送準備完了！　それじゃ、いってらっしゃい」
「やめ」

そこで、俺の意識は途切れた。

修業開始

気が付けば、不気味な森の中に立っていた。
木の一本一本が見たこともないくらいにでかく、上を見ても空が見えない。

「……」

……もしかして、来ちゃった？　グルメ界。
え？　まじで？　本当に？　夢じゃなくて？

「……」

やっべ、言葉も出て来ない。
つーか、音をたてちゃいけない気がする。
雰囲気？　というかなんというか……音を立てた時点で何かに狙われるような。

「くそぅ……あの宇宙人め。今度会ったら一発殴ってやろうか」

音をたてちゃいけないといっても、ついしゃべってしまう。
おかしいな。こんなに独り言は多くなかったはずだけどな。

まあ、そんな事をうだうだ思っててもしかたない。
なんとか能力使って二百年生き延びなければ。
宇宙人は不老とは言ってたけど、不死とは言ってなかったもんな。
まずは能力の確認と一日を生きることを目標にするか。

「目標ひっくいな……」

――こうして、俺の修業生活は始まった。

――１９９年後。

この世界に落とされてはや１９９年と３６４日が経った。
今の俺の身体はあちこち傷だらけで、左目にも大きな傷跡がある。
もう精神年齢はじーさんだな。
けどあと一日でこの世界ともおさらばだ。

「……よく生きて来られたなぁ、俺」

しみじみと今までの地獄を思い出す。
正直なんど死ぬかと思ったことか。
ぶっちゃけ、最初の二日くらいで根をあげそうになった。
それに最初の三年は能力フル活用しながらひたすら逃げ続けた。

それからは自分自身を鍛えた。
俺は何かを召喚してる間はシャボン玉並に防御が弱くなるわけだ。
なら相手の攻撃が当たらなければいいんじゃないか？　という考えから。

そして覇気とか氣とかチャクラとか魔力とか気合とか霊力とか、いろんなものに手を出してみた。
「やってみればできるんじゃね？」という軽い考えからやってみたわけだが。
まあできちゃったんだなこれが。

覇気は覇王色の覇気は出来なかったが武装色の覇気、見聞色の覇気が
大体できるようになった。

初めはどう修業すればいいのか全く分からなかったので
ワンピースの世界からレイリーさん召喚して修業つけてもらった。
時間は十分すぎるほどあるので、みっちり勉強させてもらったぜ。
その結果、完全に習得するのに十年かかっちゃったんだよ。
ルフィは二年だったらしいけど、あいつ天才だと思う。

でもそのかわり、多分ルフィよりかは覇気の扱い上手いと思う。
それとついでという事で六式も教えてもらった。
レイリーさんが知ってたのが驚きだった。
なんで知ってるんスか？　と聞いたら、やんちゃしてた頃に海軍本部に
殴り込みして六式の使い方教わってきた、という恐るべき答えが返ってきた。
なにやってんだあんた。

ついでに剣術も誰かに教えてもらおうと思って、鷹の目のミホークを
召喚した。
ワンピースで世界一の剣豪と呼ばれている人だ。
剣術は大体レイリーさんに教わったけどな。
それで模擬戦とかやったけどミホークは人間枠から完全に外れてると
思うんだが俺の気のせいか？
だって普通にどでかい山を真っ二つにするんだもんよ。
六式の鉄塊をしようとも思ったけど、ミホークって鉄の斬れる事を思い出して
ひたすらよけることにした。俺の使う刀も斬ってくるからやばいのなんのって。

けど最終的には俺も鉄を斬れるようになってミホークと互角くらいには
戦えるようになった。でもミホーク呼んでる間は能力使ってることになってるから
基本避けるだけだけどね。たまに隙を見つけて全力で攻撃するくらい。
勝てるかどうかは五分五分。

氣はだれに教えてもらえばいいのか分からなかったので、
孫悟空さん召喚してみました。
……結果からいうと、失敗だったわけだが。
教えてくれるっちゃあ親切に教えてくれるけどいまいち分からないんだ。
氣ってのがさ。
体の内にある氣を感じ取れって言われたけど全然分からない。
だからもうね、実戦で覚えろと。
そんな事を言われた時は思わず目の前にいた亀って書いてある服を着た人に
殴りかかってしまった。

悟空は嬉々として相手になったが普通にぼろくそにやられました。
だって戦闘民族だぜ？　サイヤ人だぜ？　しかもスーパーサイヤ人にも
なってくるしさ。
グルメ界の猛獣も普通に倒してくるんだぞ？
そんな相手にどう勝てと。
……でも最終的には戦えるようになったよ。やればできるじゃん、

俺！
あとなんでか界王拳使えるようになった。六倍くらいが限界だけど。
もう人間の限界をとっくに超えていることに気づいたのもその時だ。

忍術を教えてくれる人はカカシに決めた。
そんで召喚してみたわけだが、いくら待っても出て来ない。

「あっれー？　失敗か？」

と、二時間くらい待ってたらようやく現れた。
まさか召喚されても遅刻するとは思わなかった。
そしてまず最初に多重影分身を教えてもらった。
そう、原作でもやっていたチート修業法をするためだ。
でも俺はチャクラ量が少なかったため、二十人が限界だったけどな。
ナルトは膨大なチャクラで千人に分身してたけど本当に凄いと思う。
次に俺のチャクラの性質を調べてみた。やり方は全く同じ方法で。
その結果、性質は雷、火、水、風の四つだった。凄くね？
カカシも驚いてた。
まあチャクラ量がそれほど多くないからあまり意味ないけどな。
でも千鳥とか螺旋丸とかもできるようになったし、水の上とか壁を歩けるように
なったのは嬉しかった。

次は霊力でブリーチの鬼道教えてもらおうと思って、
山本元柳斎重國を召喚しちゃった。

「鬼道教えてもらえませんか？」
「……それは無理じゃ」
「え！？　なんでですか！」
「お主は死神ではないからじゃ」
「……」
……あっ。

という事があって鬼道は無理だった。
でも白打と歩法を教えてもらったし、瞬歩もできるようになった。
あと、これも何かの縁じゃって言って浅打っていう斬魄刀くれた。
いや俺、斬魄刀いつでも召喚できるからいらないんっスよとは言えなかった。
それでも嬉しくて、ずっと使ってたら何故か始解と卍解できるようになった。
本気で何故だ。
もう人間じゃなくて人外っつー種族に入ってると思う。

……と、こんなことがあった。

これらだけじゃなく別の世界からも強い人召喚して修業してもらった。

他にもグルメ界の食材もいろいろ食べてみたけど、すごいね本当に。

うますぎてうますぎて。

フルコースなんて決められない。食べたものの名前なんか分からないし、

食べ比べしてもどっちがおいしいかなんて全然わからない。というか覚えてない。

でもグルメ界では普通に生きられるようになった。俺人外だから。

それでも一瞬も気が抜けない。

気を抜いたら即終了、ハイお陀仏するかもしれないからな。

「けどそれもこれももう終わりだ。やっと地獄から解放される……！」

と、いきなり俺の身体が光ってきた。

それと同時に急にあの宇宙人の声も頭に響いてきた。

『――――ひさしぶり、宇宙人だよ。
今から異世界に送るわけだけど、その時に君の身体を二百年不老にして
代償でちっちゃくなるけど勘弁ね。
でも身体能力は今の君となんら変わらないから大丈夫だと思うよ。
じゃあ、いってらっしゃい』
「ちっちゃ……！？」

そこで、俺の意識は途絶えた。
デジャブ……。

「行った……か。久しぶりに見てみたけど……」

そこで宇宙人は言葉をきり、軽くほほえむ。

「まさかあそこまで成長するとはね……。君には驚かされてばっかり。

さてそれじゃ、わたしも仕事にもどるとするかぁ。

じゃあねー。渡り人くん。

次の人生を楽しむといいよ」

初めての戦闘……ちょっと物足りないな

そして気づいてみれば、俺は地面に寝っ転がっていた。

「あの宇宙人め……。どんな世界に送るのかぐらい教えろよな。
それに本当に幼くなってるみたいだし、くそぅ……」

自分の手足を見てみるとちっちゃくなっており、目線もかなり低くなっている。
たぶん八歳くらいだと思う。

「こんなんで戦えんのかよ？　それにここはどこだ？」

見渡すと目の前に広がるのはだだっ広い草原。
少し遠くに見えるのはヨーロッパの風景を思い出させる山々。

「おお……なごむなぁ……。空気がうまい」

深呼吸をして空気を思いっきり吸い込む。
グルメ界ではこんな安心できる場所なんてどこにもなかった。
かなり頻繁に季節が変わったり、いきなり身体が重くなったり
いつのまにか猛獣の群れに囲まれてたり、

急に霧が出てきて視界が悪くなったり等々……。
それでも軽い方だったんだけど。
ひどい時は少し寝てたら猛獣の腹の中なんて事もあったりした。
丸のみしてくれて本当に助かったと思う。

でも少なくともここはグルメ界ではなさそうだ。
周りの気配を探ってみてもそれほど危険な獣の気配はない。
じつは俺は、グルメ界で生活してるうちに五感が鋭くなっていたようで
少し遠くにいる生き物の音、こちらへ向かって来ているかなどが分かるようになっていた。
見聞色の覇気でも使えばもっと遠くまで感知できるんだけど、今は必要ないだろう。
無いと信じたい。

それにいつまでもここにいるワケにはいかない。
この世界には人がいるか分からないし、もしかしたらいないのかもしれない。

「とりあえず南にでも行ってみるか」

コンパスを召喚して南をさした方向に歩きだす。
もちろんコンパスはすぐに帰した。

ちなみに今の俺の服装は死神装束。
なんで？　と聞かれたら俺もなんで？　と聞き返すぞ。
俺もなんでこの服を着ているかは分からないから。
気づいたら来てたんだ。摩訶不思議。

なので見た目はまんま死神。
……子供の死神だけどな。

そういえば、グルメ界にいた時もふと思ったんだけど俺の能力ってよく考えれば
戦争起こせるんじゃないか？
いくらでも召喚できるんだから、アニメとか小説とかマンガの強い人達を
片っ端から召喚すれば世界ぐらい征服できそうな気がする。
いや、そんな事はしないけど。

そんな事を考えながら歩き初めて三時間ほど。
小さくなっているから体力も少なくなっているのかと思っていたがどうやらそんな事はないらしい。
確かにあの宇宙人が言っていたとおり、体が小さくなっただけでそれ以外は
変わってないみたいだ。
さっき試しに瞬歩をやってみたら普通にできたし、忍術も使えた。
ただ腰に挿していた斬魄刀だがこの体では大きすぎて歩くのに邪魔になったので
今は背中に背負っている。
小さいって不便。

そのまましばらく歩いていると、
少し遠くに道らしきものが横切っているのが見えてきた。
道といってもコンクリートや石かなにかで舗装されているわけでもない。
長い間踏み固められて自然と道になったという所だ。
道は他の場所とちがって草があまり生えていなく、人の足跡のようなものが

あるのが分かった。
それをみて俺は少し安心する。
どうやらこの世界には人間か、それに近い生き物がいるようだ。
ということはこの道を歩いていけば人里か何かにたどり着くだろう。
ちょっと迷って俺は左の方向に行くことに決めた。
とくに理由なんかはないが、まあただの勘だ。
――――ふ。長年自然の中で生きてきた俺の勘は大体あたるぜ。
直観力というやつだ。
といっても、良い方に転んだことはあまり無いのだが。
で、再び歩きだしてしばらくしたころ。

「ん……？」

ふと何かの気配を感じて立ち止まる。
この気配は……これ、狼か？
二メートルくらいある大きな狼らしきモンスターをはっきり感じた。
しかもこっちに猛スピードで向かって来てる。

「あー……。俺を狙ってんのか？　これ」

ならちょうどいい。
この身体での戦いに慣れたかった所なんだ。

相手になってもらおうか。

「そんなに強そうでもないし、武装だけでいいか」

適当な加減で身体に武装色の覇気をまとう。

「よしこい！」

背中に挿してある浅打を抜いて狼の方を向いて構える。

……見えた！　ってバトルウルフじゃね！？

「……存分にやれるじゃないか。先手は貰うぞ！　一刀流　厄港鳥！」

刀を縦に振り、三日月型の斬撃を飛ばす。

元々はゾロの技らしい。ミホークが言ってた。

しかしバトルウルフ？　は斬撃を横に跳んで回避し、俺に猛スピードで

近づいてきてそのまま噛み付いてきた。

……おそいな。

前言撤回、こいつはバトルウルフではない。

バトルウルフならこいつの何倍も速い。

俺は瞬歩で避けると同時に後ろに回り込み刀を振り下ろす。

「殺(と)った！」

ガキン！

しかし。
俺の攻撃は金属音が鳴り響き弾かれる。

「え？」

俺が一瞬呆気にとられた隙に狼の尻尾が俺に直撃した。
でも武装をまとっていたため痛くもかゆくもない。むしろ狼の方がダメージを受けたんじゃないか？
とりあえず俺は距離をとってこちらを威嚇している狼を観察する。

「弾かれた？　っつーことはなんだ？　鉄並かそれ以上に堅いってことか？」

マジかよ。
やりづらいな、それにめんどくさい。
つーか鉄並の硬度ならなんでさっきの厄港鳥を避けたんだ？

「……別にいいか。鉄並に堅かろうが俺には関係ないからな」

ミホークに修業つけてもらっておいて良かった。

「……」

ひょい。
狼が素早く襲ってきたので、軽く身体を動かしてよける。
狼もなかなか動きが速いが二百年逃げる事に全力を尽くした俺には全然遅い。
それにそろそろこの小さい身体にも慣れた。

「もういいや、あんがと」

俺の刀が一瞬ぶれる。そして刀を鞘に戻す。
それと同時に狼がゆっくりと倒れ、地面に横たわる。
多分狼は自分が斬られて死んだことも気づいてないだろう。
そのくらいの速さで斬った。

「さて……じゃあ」

グウウウウゥゥゥゥ〜
腹が減ったから……。

「食べるか！」

原作キャラ登場……ってちっさ！

この世界に来てから二日。
俺はいまだ人里らしき所にたどり着いていなかった。
そこで思ったんだ。
歩くのメンドい、と。

「影分身の術」

ボボンッと煙をたてて現れる四人の俺。

「というワケで今から東西南北に分かれて探索するように。
で、なにか見つけたら俺に念話か逆召喚な」
「いや、俺がメンドくさいと俺もメンドくさいんだが。俺だし」
「そうだぞ。誰かを召喚すればいいんじゃないか？」
「それだと俺自身が弱くなっちゃうから却下」
「つべこべ言わずに行動する！　行け！」

四人の俺は不満そうな顔をするも、一瞬で消えて探索に向かう。
自分を同じ顔が言い合うのを見るのはちょっと違和感があるな。

「さて俺は……漫画でも読むか」

適当に座って木に背中を預けながら召喚した漫画を読み始める。
因みに読んでいる漫画はＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬだ。

とある森林の中で、呑気に漫画を読んでいる子供がいた。
その様子を第三者が見たとしたらおそらくこう思うだろう。
自殺願望者？　それともアホの子？　と。
それもそのはず、子供が漫画を読んでいるこの森林はモンスターが凶暴の
ため滅多に人が入らない所なのだ。
魔法が使えればモンスターと戦えるのだが目的もなく
この森に入ることはまず無い。
なので間違ってもこんな小さな子供が一人で入るような場所ではないのだ。

ふとヘラヘラと漫画を読んでいた子供が何かに気づいた様に顔を上げる。
そのまま立ち上がって辺りを警戒するようにキョロキョロと見回す。

「またか……。この森はなんでこうも襲われやすいんだ？
いっそ森ごと消してやろうか」

そんなぶっそうな言葉を口にしながら漫画を消し準備体操を始める。

「武装色と……数が多いから一応見聞色もしておくか」

いつの間にか子供は体長二メートルはあろうかという虎のようなモンスターに囲まれていた。
しかし子供はあわてる事はなく、むしろ平然としている。

「それと……」

何を思ったのか子供は懐から布のようなモノを取り出し自分に目隠しをする。

「修業もかねてハンデはこれでいいだろ」

そう言って中指をつきあげる。
……しかしやっているのがミニマムな子供のため、はたから見ればかわいらしいことこの上ない光景だった。
おばちゃんがされても、あらあらまあまあと言いそうだ。
しかしそれを合図としたのか虎たちは一斉に襲いかかった。

「……む？」

木々が生い茂る森の中、赤い髪をサイドテールにしたのを三つあみにし、
鎧を着ている少女が何かに気づいたのか顔を上げる。

「なんだ？　誰かいるのか？」

彼女の名はエルザ・スカーレット。
妖精の尻尾（フェアリーテイル）に所属する魔導士である。
とある依頼でこの森に来ていたのだが、遠くからモンスターと人の気配がしたのだ。
この森はモンスターが凶暴という事で知られており、魔法が使えない人が入るという事はない。
しかし小さな子供が迷い込んだのだとすれば、助けないわけにはいかない。

そう考えたエルザはすぐに音のする方向に走り出した。

「そろそろか」

走り出して数分、エルザは目的地へとたどり着いた。

「……これは……！？」

そこでエルザは思わず目を見開いた。
一人の自分を同い年くらいの子供がモンスターに囲まれながら戦っていたためだ。
戦っている子供はモンスターの嵐のような攻撃を避けているだけ。
それ以上にエルザを驚かせたのが、避けている子供が目隠しをしている事だった。
エルザも子供にしては強い方なのだが、さすがに虎の大群と戦って生きていられるかは分からない。
その上、目隠しをするなんて考えられない。
いや、そもそも自分の知る限りではこのモンスターは群れないはずだ。なぜこんなに集まってたかだか人間の一人を襲っているのか
も分からなかった。
どうやら虎たちはエルザがいる事すら気づいてないようだ。

「あの少年、最小限の動きでかわしている……？」

エルザが見る限りでは、少年の動きに一切の無駄が見られず
それに一定以上その場から移動していない。
攻撃を受け流しながら避け、さらに死角であろう攻撃でさえも簡単に避ける。
目隠しをして、だ。
まるで落ちてくる落ち葉の様にひらひらと動いてかわす。
動きが全く予測できない。酔拳のようだ。
エルザは虎たちが自分に気づいてないのをいいことに、
いつの間にか戦っている子供に見入っていた。

（強い……）

エルザは思った。
魔法を使っている様子も無く、己の身体能力だけで戦うことは
並大抵の事ではない。
魔法を使えないのかもしれないがただの子供ではない事は分かる。

「ん？　あそこにいるのって……エルザ！？」

襲ってくる獣をかわしながら先ほどから気づいていた気配の元を見る。

目隠しを少しずらして見ると、そこにいたのはエルザ・スカーレットだった。

ついさっきまで見ていたＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬの登場人物である。

驚かないワケがない。

でも漫画で見ていたエルザにしては小さい。子供のエルザだ。

ってことは、この世界はＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬの世界ってこと？

うわぁ、アニメ漫画の世界かよ。

「へぇっ……実際に見るとかわいいなっと」

エルザに気を向けながら猛獣の攻撃をなんなくかわす。

見聞色で動きが先読みできるので避けるのは簡単だ。

「まあいいか。修業にもなったし、そろそろ終わらせようか」

攻撃してくる虎たちから瞬歩で距離をとる。

「召喚」

そして虚空に手を伸ばし、一振りの刀を掴み取る。
召喚したのはブリーチの朽木隊長の使う刀、千本桜。
刀身が無数の刃に枝分かれして対象を切り刻むというけっこう凶悪なものだ。
でも今回は相手が少し多いから始解ではない。
……というわけで。

「卍解」

斬魄刀を地面に落とす。

すると斬魄刀は吸い込まれるように消え、それと同時に足元から巨大な千本の刀身が次々と出てくる。

「――――千本桜影厳――――」

直後、それらが一斉に舞い散り、

「いけ」

――――全ての虎が、桜色に輝く圧倒的な刃の奔流に呑み込まれた。

「ふぅ」

やっぱり千本桜影厳はいいね。
防御と攻撃が同時にできるから安心して使える。

「さて、そこに『おーい、本体』……ん？」

エルザに話しかけようとしたところで、探索に出ていた影分身から念話が来た。
なにか見つかったのか？
気のせいか少し興奮気味だ。

『こちら本体こちら本体。なにかあった？』
『ああ、とびきり凄いのがあるよ。俺の目の前に』
『すごいの？』
『聞いて驚くなかれ、妖精の尻尾（フェアリーテイル）のギルドだ！』
『本当か！？　すぐに俺を逆召喚してくれ！』
『もちろんだ』

どうやら分身の一人が妖精の尻尾（フェアリーテイル）のギルドを
見つけたらしい。
こりゃ、この世界はフェアリーテイルで決まりかな。
あぁ、逆召喚ってのは分身が俺を召喚することだ。
分身のいる場所に一瞬で移動できるんだ。

「おい、そこのおまえ！」

と、分身と念話を終わらせると呆気にとられていたエルザが
話しかけてきた。

「どこの「あ」……な！？　消え、た……？」

しかしエルザが話している途中で急に俺の視界がぶれて。

「よう、俺。逆召喚したぞ」

――――次の瞬間景色が変わっていた。

そして、目の前には分身の俺が。
その後ろには妖精の尻尾（フェアリーテイル）らしき建物があった。
あれ？　エルザは？

……まさか

「……」
「……どうした？」
「やっちまったーー！！」
「うわっ！　うるさいな！」

せっかくエルザと話せると思ったのに！
逆召喚のせいで話せなかったじゃん！

とはいっても分身は俺だから俺のせいでもあるんだけど。
……ややこしいな。
それでもエルザとは話したかったので、とりあえず目の前の俺を睨み付ける。

「あ、あれ？　なんかマズかったか？　普通に逆召喚したんだけど？」
「……」
「……謝った方がいいのか？」
「……いや、もういいや。……はぁ。じゃ、消えてくれ」
「おう、なんか知らないけど悪かったな。じゃ」

謝罪を残して煙を立てながら消える分身。

「……ま、いっか。気にするほどでもないだろ」

気分を入れ替えてギルドの扉を――――

「何か用かの？　少年よ」

開ける前に誰かに声を掛けられた。

「む？」

振り向くと、俺より背が小さい老人が立っていた。

「あんたは……」

マスター・マカロフ。妖精の尻尾（フェアリーテイル）のギルドマスターだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6584y/

召喚師の転生物語

2011年11月21日07時09分発行